



ヴァイオリン奏者

平崎 真弓

昨年12月にロレンツォ・ギエルミ率いるラ・ディヴィナ・アルモニアのメンバーとして来日された、平崎真弓さんにお話しを伺いました。この5月にコンチェルト・ケルンのコンサート・ミストレスとして再来日されます。

MAYUMI HIRASAKI

——子供の頃から音楽を。

平崎 バッハが好きでした。夕食後にピアノでバッハの「インベンションとシンフォニア」を弾くのが楽しみでした。ハーモニーが一度に把握できるし、対位法という言葉を知る前からそういうものが好きだったのでしょね。小学校の授業で「小フーガト短調」を聴いたとき、なんだあ！この音宇宙はと、衝撃を受けました。ピアノの先生に、「家にパイプオルガンが欲しいです」と…、子供ながらの夢でした。

——学生時代についてお話しください。

平崎 モダン・ヴァイオリンで弾くバッハには求めている音色を見つけられなかった。また、ヴァイオリンを通して歌うという意味がわからなかった。レッスンで歌いなさい、もっと音色をなどと言われても、結局はテクニックの要素が最初で、そこから自分を主張しろって感じで、自分の中に距離感がありました。しかしヨーロッパに出て、文化の違いを直に体験し、少しずつ身近になった。例えば、ドイツ語を学んでドイツ語圏の作曲家を弾くだけで近くなった気分になるようなインプロヴィゼーションとか、自由になれる瞬間をさがすのが好きでした。

——古楽に出会うきっかけは。

平崎 ニュルンベルクに留学中にオルガニストと共演する機会があって、パイプオルガンを弾かせてもらいました。面白くて、これは絶対に習いたいと始めたんです。ヴァイオリンだけでなく違うものから音楽をアピールすることにもすごく憧れていましたので。あるとき、「オルガン練習には、チェンバロもいいよ」と言う人がいました。それからチェンバロの先生のところに行って、自分の好きなバッハのシンフォニアを弾いたら求めているものに出会ったんです。バッハはコンクール曲にも入っているし、弾かなくてはいけなカリキュラムでしたが、モダン・ヴァイオリンで幸せだと思ふ瞬間が少なかったんです。

——ピリオド楽器を志す一番のキッカケは。

平崎 2006年のバッハ・コンクールです。ライブツィヒに行けば、大好きなオルガンも聴けて(笑い)、バッハをバッハの地で弾けるので受けました。このコンクールは、モダンとバロック・ヴァイオリンの両方が選べます。コンクールは何を要求しているのか、1次予選前にホールや響きを知りたくて聴きに行って、バロック・ヴァ

イオリンで弾く人の演奏を聴いて響きに感動しました。「この響きだ…、これだよ」と。

——モダンで受ける日、ピリオドの日というのがあるのですか。

平崎 いいえ、一緒です。審査員はバロック半分、モダン半分です。私の前にはバロック・ヴァイオリンを弾いている人もいました。

——垣根がないのですね。楽器より、バッハが好きでやりたい人が受けに来るといふ…。

平崎 はい。私はとてもラッキーでした。モダンでいって、バロック楽器を弾く人を聴いて、響きはこっちだねって(笑い)。でも、自分は経験の長いモダンでいこう、自分の出来ることをシッカリやろうと決めていました。でもモダン楽器によるバロックの演奏法を、何か変だなあと感じていました。モダンの人は、なんでみんなロマン派っぽく弾かなきゃいけないんだろうと。2次ではコレリかヴェラチーニと、モーツァルトのソナタも入ります。前者2人は、モダン・ヴァイオリンで受ける国際コンクールのレパートリーには入りません。ほかの国際コンクールも受けていて時間がなかったこともあり、コレリは複雑な曲ではないので、当時ニュルンベルクの市立図書館にあったものの中から選曲出来るものを探しました。でも、国際コンクールになんでこんな複雑ではない曲を弾かせるんだろうって思って、いろいろな版を比べたり、探したりしました。そして、自分の選曲したソナタにジェミニアーニの装飾版を見つけました。それは三段譜のようになっていて、コレリのオーナメント(装飾)なしの原版と、ジェミニアーニが付けた装飾のパートとコンティヌオが書いてありました。それを見て、これは私の選んだソナタじゃない、なんでこんなヴィルトゥオーゾな装飾が書いてあるんだろうって。

——それはジェミニアーニが作ったのですか。

平崎 はい、彼が作曲(施した)したオーナメントです。私はチェンバロの先生に、このソナタはこういうふうに弾くんですかって聞いたら、「ジェミニアーニみたいに君が装飾してもいいんだよ」とわれちゃって。

——それはコンクールの何日前ですか。

平崎 数週間前かな。あわてていろんなCDを聴いてみましたが、付け焼刃ではバレると思い、ジェミニアーニを弾こうと

決めました。面白かったのは、感覚的にまったく困らなかったことです。こんな風にとせば思うほどアイデアが出てきました。結局コンクールで運よく第2位になりました。ファイナルの後、審査員のマリー・ウテガー先生から「あなたのコレリは、最高に良かった。私は好きよ」とお言葉をいただきました。コレリは誰にも習わず、オーナメントについても同様で、とにかく舞台に出る数秒前まで心配して弾いたソナタです。そして先生は「あなたは、絶対バロック・ヴァイオリンをやるべきよ」とおっしゃいました。

——その入賞はある意味、ジェミニアーニさんのおかげですね。

平崎 はい。でもバロック界の人であれば、私ガなんの装飾を弾いているかわかりません。誰の影響も受けていない、ジェミニアーニから学んだだけのコレリのソナタをマリーが気に入ってくれたこと、コンクール後に彼女の講習会を受けたことで、彼女から是非習おうと決心しました。バロック・ヴァイオリンを習ったのは2007年から2008年の1年間で、2008年にクリスティーネ・ショルンスハイム先生からチェンバロを専科で取ることになって、ミュンヘンに引っ越しました。フォルテピアノも副科で取って、通奏低音も勉強しながら、ヴァイオリンの仕事をしていました。

——その前にブルージュのコンクールを受けていますね。

平崎 2008年です。バロック・ヴァイオリンを始めて1年経っていませんでした。まだ古楽というものが全然判ってなくて、他のバロック音楽をやっている人たちを見たかった。ブルージュだったら、ガンバやリコーダー、歌、オーボエとか他の楽器もいっぱいあるので、行ってみました。

——それで3位に入ったのですね。

平崎 ベルギーはチョコレートが美味し、ワッフルとチョコレートを食べるにベルギーに行きました(笑い)。その時に聴いてくださったのがヴィットリオ、ロ



福井から東京に移動した「しらさぎ号」の車内で、たいやき君と。

レンツォさんなどがいました。ヴィットリオがきっかけで、ロレンツォから「弟からアドレスをもらいました。一緒にコンサートをやってくれませんか?」というメールをもらいました。実は私、ロレンツォ・ギエルミの大ファンだったんです。

——いつからですか。

平崎 自分がオルガンを始めた2006年くらいです。オルガンの先生の奥さんが、薦めてくれたのがロレンツォのCDでした。アーレント・オルガンを弾いている、ミュンヘン・ドイツ・ミュージアムの昔のCDです。バッハの小フーガト短調が入っています(ウフフと笑いながら)。それを聴いて、最高だなあと思いました。ニュルンベルクの国際オルガン週間に来たロレンツォ・ギエルミを、先生の家族と一列目で聴きました。ロレンツォ・ギエルミさんて、靴下でオルガン弾いているとか…、思いながら。当時は、私ファンなんですと言って挨拶したんです。ブルージュのコンクールは、私に大事な経験を残してくれました。いろんな古楽器の音が聴けて、審査員のコンサートでヴィットリオのガンバが聴けた。そのときガンバを初めて聴いたんです。アーベルとかをソロで弾いたんです。

——すばらしいんだって!?

平崎 本当に素晴らしかった。これだけでもブルージュに来てよかったと思うくらいです。ロレンツォのオルガンも大ファンだったので、このコンビネーションはどうしたらいいんだろうかって言うくらい幸せで。それがきっかけで、ロレンツォがオリノの自宅に1度、私を呼んでくださいました。そこで、いろいろなソナタを、譜読みじゃないですけど、さらさらっと、20曲ほど弾きました。

——それって試されてますね。

平崎 試されましたね。「問題ない」って喜んでいただきましたけれど。それからラ・ディヴィナ・アルモニアに参加しています。

——話は飛びますが、そのときジュリアーノ・カルミニョーラは知っていたの?

平崎 私はただのファンでした。CDだけです。モダンの勉強をしていたときに、友達がくれたプレゼントが

ヴィヴァルディの「四季」でした。なんだこの人っはっっ!!って、それからずっと追って聴いていたんです。仕事でスイスに行った時に、北谷直樹さんからカルミニョーラ先生のクラスの伴奏を担当されている矢野泰世さんを紹介いただきました。それがきっかけで、カルミニョーラ先生と知りあうことになりました。

——ルツェルンでね。

平崎 はい。ミュンヘンに住みながら、月1くらいで通っていました。先生の弾くヴィヴァルディのコンチェルトの要素を習いたかったので。

——コンチェルト・ケルン(CK)との出会いは。

平崎 ケルン近郊のブリュール城で開催されたフェスティバルが組織したオーケストラのコンサートマスターをしました。その中にCKの音楽ディレクターもしているフルート奏者のマルティン・ザントホフさんがいました。たぶんCKは新しいコンサートマスターをさがしながら、いろいろ試していたみたいです。もちろん第1コンマスのマルクス・ホフマンさんという素晴らしい方がいらっしゃいますけど。そしてマルティンさんから「CKなんだけど、コンサートマスターをやってみませんか」と言われました。そしてロレンツォの時のように何回か、おためし企画みたいなのをいただきました。それからコンサートマスターとしていつも呼んでいただいています。2011年からなので、ちょうど2年経ちました。

——これからCKとカルミニョーラの新しいCDが出ますよね。

平崎 ジュリアーノのエネルギーによって、CKの音が変わったと思います。どちらも個性が強い。はじめは、ジュリアーノがバッハのコンチェルトを弾く、しかもCKで。いったいどうなっちゃうんだろうと思ったのです。だって自由奔放で歌うイタリアのカルミニョーラと、CKもエネルギーギッシュだけど、どちらかと言ったらドイツ、理論がしっかりしている。そこで私はバッハのカメレオン性を見ましたね。例えばBWV1052の第2楽章などの歌う楽章。これはやっぱりイタリアの音楽なんじゃないかって。バッハ時代、ドレスデンなどにはイタリアからヴェラチーニをはじめ多くの作曲家が来ていましたからね。

【日本公演スケジュール】
5月30日(金) 19:00 東京 紀尾井ホール
31日(土) 17:00 三鷹 三鷹市芸術文化センター
6月 1日(日) 15:00 西宮 兵庫県立芸術文化センター大ホール
2日(月) 19:00 名古屋 電気文化会館ザ・コンサートホール